外国図書（大型コレクション）について

昭和56年度外国図書（大型コレクション）購入費にもとずき，下記の資料を購入し，附属図書館に蔵置しておりますので，御利用下さいますよう御案内いたします。

なお，教養部の林　功三先生にこの資料についての詳しい解説を執筆していただきましたので，御利用の手引きとして紹介いたします。

ワイマル共和国時代文献コレクション

（教養部・ドイツ語教室）　林　　功　三

総数1,566冊を数えるこのコレクションは，「文学に反映したワイマル共和国」というドイツ語の名称のとおり，主には，ワイマル共和国時代の代表的な作家・詩人の作品や，雑誌を集めたもので，その多くが初版本であります。比較的多数の著作が収録されている作家の名前だけをいまＡＢＣ順に列挙してみますと，次のような人々が挙げられます。

H. Ball, M. Barthel, J. R. Becher,
G. Benn, B. v. Brentano, B. Brecht,
A. Döblin, H. Fallada, L. Feuchtwanger,
B. Frank, L. Frank, G.Grosz,
W. Hasenclever, G. Hauptmann, H. Hesse,
A. Holitscher, E. Jünger, H. Johst,
G. Kaiser, E. kästner E. E. Kisch,
Klabund, Th. Lessing, E. Ludwig,
H. Mann, Th. Mann, W. Mehring,
A. Neumann, R. Neumann, R. Pannwitz,
E. Piscator, E. Reger, E. M. Remarque,
L. Renn, J. Roth, R. Schickele,
A. Schnitzler, E. Toller, B. Traven,
K. Tucholsky, J. Wassermann, F. Werfel,
C. Zuckmayer, A. Zweig, S. Zweig u. a.

このようなリストからもわかりますが，このコレクションは，まさに「文学に反映したワイマル共和国」というタイトルのとおり，ワイマル共和国時代の，革命的な文学をはじめ，リベラルな文学，ファシズムの文学（ヨースト．ユンガー等）までを巾広く集め，文学だけをみてもさながら時代全体がわかるようなかたちをとっています。この巾の広さという点が，このコレクションの第一の特色であるといってよいと思われます。

そもそも，この時代の文学の原資料は，社会主義的．革命的な文学作品はもとより，リベラルな文学作品の大部分も，ナチスによって徹底的に抹殺されたため，今日ドイツでもほとんど入手不可能になっております。いまよくこれほど当時の書物を集めたものと驚くほかありません。また，逆にナチスの文学は，今日の私たちには反ファシズムの文学以上に，入手不可能になっていますので，ファシズム研究がアクチュアリティを失っていない現在，このコレクションは研究者にとって貴重な資料であります。

さらに，巾の広さという点でいえば，このコレクションは，けっして文学に限られていません。Literatur ということばは，一般に《文献》をも意味しておりますが，このばあいもそうです。ワイマル共和国時代のドイツやオーストリアにいた著名な多くの社会民主主義者，共産主義者，ボルシェヴィスト，ロシアにいたドイツの共産主義者，さらにはワイマル共和国の政治家，哲学，経済学，社会学の分野における指導的な学者さらには自然科学者の著書をもこのコレクションは集めております。先述の作家，詩人，芸術家の第一

グループに対して，これを第二グループとみることができます。第二グループの主な人びとの名前を挙げてみますと，次のような人びとがあります。

V. Adler, N. Bucharin, F. Ebert,
K. Eisner, M. Harden, K. Kautsky,
G. Landauer, W. I. Lenin, K. Liebknecht,
R. Luxemburg, K. Radek, W. Rathenau,
C. Schmitt, A. Schweitzer, K. Einstein,
O. Spengler, L. Trotzki, M.Weber,
C. Zetkin u. a.

主として文学を研究対象にする研究者にとっても，このような文献は不可欠なものであります。私たちの教養部ドイツ語教室も，かねてからワイマル共和国時代の政治，社会思想史や労働運動史の資料を意欲的に集めており，また研究をすすめております。

ワイマル共和国時代の研究は，現在，文学芸術の他にも，労働運動史，ファシズム研究，経済学，社会政策論など，さまざまな分野でおしすすめられており，これらの分野の研究は，今後，現在の世界にとっても重要な，綜合的な研究に発展することが期待されます。先ごろ，3月の末に京都大学の各学部，研究所から，さまざまな分野の研究者が集まり，このコレクションの共同利用に関する相談をいたしましたが，その折にも，この点は共通の認識になっていたと思われます。

上述のように，このコレクションの第1の特色は，たしかに巾の広さという点にありますが，しかし，それは，このコレクションがたんにディレッタント的な，蒐集マニアによって無差別に初版本，希覯本を網羅されたものであることを意味しておりません。リベラルな文学やナチズムの文学までもが巾広く集めていながらも全体はかなり明確な政治的志向によって貫かれている，とみてよいでしょう。たとえば，ブレヒトの作品がことごとく初版本で集められていること，マリク出版社の刊行物の当時の出版物の大多数が収められていることなどに，その特色がよくでています。後者について調べてみますと，1967年，東独の芸術アカデミーがおこなったマリク出版社展覧会に出された全刊物のほぼ80パーセントが，このコレクションに収められています。つまり，67年にドイツ民主共和国が国家的レベルで集めた古書の大部分が，こんどまとまって日本に入ってきたことになります。この一事をみても本コレクションの価値がわかりますし，またコレクションの第2の，重要な特色がどこにあるかがこれでわかると思います。

このコレクションは，第2次大戦直後，西ドイツのある町で連合軍の爆撃により廃墟となった家屋の地下室を掘りおこしていたとき，瓦礫の中から発見され，いったんアメリカに渡り西ドイツに返却されたしろものである，と私たちは聞いております。ナチズムの荒れ狂うなかで反ファシズムの政治的志向をもったひとりの無名の愛書家が，身の危険を賭して隠匿していた蔵書だったのでしょうか。そして，この蔵書を，60年代以降，西ドイツの本屋が，さまざまに補充して現在のコレクションにまとめ，このようなかたちで私たちの手に入ったのでしょうか。上述の3月末の京都大学のミーティングのさいに研究者のひとりは，ことによると，これはナチスの押収した蔵書だったのかも知れない，いずれにせよ，これらの書物は血まみれの歴史のなかからのものであることを私たちは忘れるわけにはいかない，と自己イロニーをこめて語っておりました。たしかにかれのいうとおり——売りに出した業者の意図はどうであれ——歴史の重みは，私たちにこれを懐古的・ディレッタント的なコレクションとみることを許しません。最近日本でも「黄金の20年代」などといってワイマル時代の文化を半ば懐古的に紹介する風潮が一部のジャーナリズムでは再び流行しておりますが，コレクションを前にして，私たちはそういう受けとめ方をするわけには参りません。「黄金の20年代」というのが神話でしかなかったこと，ワイマル共和国時代というのは，文化の領域においても，ルカーチ流の表現をかりれば「進歩と反動のたたかいの時代」であったことを，何よりもこのコレクションは私たちに示しています。

かってアデナウアー時代にも「イデオロギーに

とらわれない自由な立場」が強調され，「黄金の20年代」の神話が持ち出されたことがあります。ワイマル共和国時代は自由で民主的な時代であったのに，左右の過激なテロル潮流が，ワイマル連合のような中庸と自由の民主主義をつきくずしたのだ，といわれました。あれは歴史の現実を隠蔽し，ファシズムを降って湧いた災難のようなものとみなし，若い連邦共和国を反動的な伝統的路線に結びつけようとした，悪質なイデオロギーでした。じっさいには，ワイマル共和国の時代にも，歴史におくれたドイツの市民階級は時代の矛盾を解決できなかったのです。だから，共和国のなかでＤＤＰのような政党は，何ら重要な役割を演じることなく，あれほど急速に衰退していったのです。文化的領域でも，「おゝ人間よ！」の表現主義から，技術への熱狂，非合理主義的な「事実の独裁」の新即物主義へ，ナチズムへのあまりに急速な解体過程がみられたのでした。そういうなかで例外的にＴ．マンのような作家は，歴史の岐路に立って選択を迫られたとき，はっきりと「進歩」の側に立つことを表明したのでした。

ワイマル共和国のなかでは，文学を享受の対象とするのでなく，真の自由のたたかいの手段に転換しようとした作家は，いっそう少数の例外にすぎませんでした。そういう例外がブレヒトでありマリク出版社文筆家たちでした。

このコレクションが，その重点の置き方だけをみても，「黄金の20年代」などというやくざな歴史評価とは対照的な歴史評価をおこなっていることを，私たちは知ることができると思います。

他方，しかし，私たちは，現在まだ，なぜワイマル共和国のドイツでは真の民主主義が根づかなかったのか，という問題を十分には解明しておりません。コミンテルン時代以来のドイツの歴史的研究は，現在も東西ドイツにおいてさまざまな潮流によって，さまざまな分野で，おしすすめられていますが，東西ドイツの政治路線の問題がそれにからみ，問題の解明は今日いっそう複雑で困難なものになってきているといえます。であればこそ，しかし，私たちにとって，ワイマル共和国時代の研究は，いっそうやりがいのある仕事である，といってよいのではないでしょうか。その意味で，このコレクションが広くかつ徹底的に共同利用され，真の学問の発展に役立てられることを希望します。

——資　料　紹　介——②

中　院　文　庫

中院文庫は具平親王を遠祖とする村上源氏の流れをくむ久我家第七代通親の五男通方を家祖とする中院家伝世の旧蔵書で，大正十二年住友吉左衛門氏が姻戚関係の縁故で中院家より文書を含む典籍千四十一冊を一括購入して本学に寄贈されたものである。その蔵書内容は室町末期より江戸末期に及ぶ国学の註釈書，歌書を中心に元日節会次第，除目部類，中院家拝賀記など中院歴世の朝儀典礼に関する日記，書留，覚書および石清水関係，加茂祭使記等社寺に関する宗教的行事，そのほか当家装束記などの有職故実に関するものなど多岐にわたっている。これらはほとんど自筆の原本で占められ，当時の風俗史，文化史，あるいは宮廷の行事または貴族の生活を知る上にも貴重な研究資料となっている。ことに源氏物語，古今集の註釈は中院の学祖と称せられる第十四代通勝，その子通村，孫通純，曽孫通茂と続いて江戸末期まで継承されてきたものである。

通勝（永禄元年—慶長16年）（1558—1611）は室町末期の国学界における重鎮の一人であった。三条西実枝（三光院豪空），細川幽斎らに師事し，宗祇，三条西家と続く正統派源語学を受け継いだのである。また幽斎からは古今和歌集の伝および秘奥を学び歌人としても当時の歌壇に重きをなしていた。こうして中院家に源氏物語，古今集の註釈書が家学として歴代世襲されたのはこの通勝の基礎固めによるものと言っ